

---

# 本日は晴天なり

新

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本日は晴天なり

### 【Nコード】

N0625A

### 【作者名】

新

### 【あらすじ】

ごく平凡な女子高生である島田正美が取り憑かれてしまったのは、死んだはずのクラスメイト・坂上正美の霊魂だった。“正美”は“坂上くん”が残したという未練を探すため、奇妙な共生生活を余儀なくされてしまった。「本日は晴天なり」を合い言葉に、二人は坂上が生きてきた道のりを、共に歩み始める。

## 第一話 正美、取り憑かれる

友人が死んだ。

いやいや、のっけから申し訳ない。わたし自身、突然のことに少々驚いているのだ。知らせを受けたのが昨日の晩で、今日にはもう葬式に出ているのだから、頭の切り替えだってうまくいかない。分かってほしい。

週末の夜の出来事だった。金曜日の夜ってなんにもする気が起きなくて、ただぼうつと自分の部屋でドラマ見てたら、お母さんが血相を変えて飛び込んできた。クラス連絡網で回ってきたのは、クラスメイトの坂上くんの死だった。

わたしが通う高校の制服は淡い緑色をしているので、仕方なく、わたしは中学時代の防腐剤臭い制服をタンスの奥から引っ張り出した。これはちょうどよく黒っぽい色をしている。

中学時代三年間連れ添った服のはずなのだが、久しぶりにその制服へと袖を通した時は、他人の部屋に上がり込んだような違和感を覚えた。

死んだのは、わたしが通うクラスの男子 坂上くん。どうやら、自転車で走ってる時にトラックに巻き込まれたらしい。即死だったそうだ。

思えば、わたしは死に接する機会が少なかったように思う。両親は健康だし、兄弟はいない。そして祖母はわたしが生まれる前に二人とも他界しているそうなので、わたしにある“死”の体験と言えば、小さい頃に飼っていたカナリアがのら猫に食べられてしまったことくらいだと思う。

というわけで、休日であるはずのわたしの土曜の予定に、葬式が追加された。

葬儀は坂上くんの家ではなくて、メモリアルホールなんかといった、ちよつとした講堂みたいな施設でやっていた。午後五時、わ

たしがそこへと仲間三人くらいで集まってから到着した時、クラス担任の先生は何とも渋い表情をしていた。先生は全員が集まったのを確認すると、中へ入るように促した。

わたしの知らない喪服の人たち　たぶん、坂上くんの親戚の人だろう　がたくさん集まっているのをすり抜けて、わたしたちは坂上くんと対面をした。

対面と言うには、それはあまりも無機的だった。

わたしが見たのは、恐らくこの中に坂上くんが入っているであろう金色の棺桶と、坂上くんの顔が映っている写真だった。写真の中で、坂上くんはぶすつとしてる。たぶん、急なことだったのでちょうどいい写真が用意できなかったのだろう。中学時代の制服と思われるブレザーが肩まで映っているその写真は、きつと、高校入試用に撮られた証明写真だと思う。

わたしにも経験がある。何でか分からないけど、わたしはああいった時に笑顔を作れない。

坂上くんもそうだったのだろう。

わたしは、坂上くんが笑ってる顔を知っている。あんなぶすつとした顔じゃなくて。

でも、もう二度と、坂上くんの笑顔は見られなくなってしまった。そう思うと、無性に感情がこみ上げてくる。

わたしは坂上くんと仲が良かった方じゃないし、大した会話もしていない。

だけど、昨日まであんなに元気だった人が、こうもあつさりいなくなってしまうとなると、やっぱり感慨深いものがある。「悲しい」とは、またちよつと違う感情なのだった。

だって、涙が出てこない。死んだのが坂上くんだから、なのかもしれない。鏡を見てみれば、きつとわたしは、お面を被ったような無表情でいるのだろう。

あえてこの感情を言い表すならば、「虚しい」だと思う。手のひらに落ちた雪の粒のようにあっさりと消えてしまふ、命のはかなさ。

わたしは今日、それを知ってしまった。誰もいなくなった遊園地に一人紛れ込んでしまったような、胸にぽっかりと穴の空いた気持ち。

「正美」

線香の匂いが立ち込める小スペース　きっと名前が付いているのだろうけど、わたしにはこれを挿す言葉を知らない。だから、小さなスペース。その小さなスペースの横で、延々とお坊さんがお経を読んでいる。金色の棺桶の上には、例のむすつとした坂上くん。そして灰が入った……これも言葉が見つからない。灰が入った小さな風呂桶みたいなやつ。思えば、お葬式に出るのはこれが初めてだ。もちろん、通夜と告別式の違いなんて分からない。

「ねえ、正美」

坂上くんのご両親。うつむき、歯を食いしばっているのがお父さん、真っ白いハンカチでしきりに目頭を押さえているのがお母さんだろう。

坂上くんは、どちらかって言うとお母さんに似ている。

「正美ってば！」

彼女の言葉に、ハッとわたしは気付いた。

正美とはわたしの名前。暗闇でいきなり背中をつねられたかのよう、わたしはビクッと身をすくめてしまう。

「な、何!？」

「何をぼうつとしてるのよ？　早く先に進んで」

そうだった。わたしたちは何故か、うまいと評判のラーメン屋にできる行列みたいなを作っていたのだ。この行列が、あの例の灰をつまんでおでこに近付けるためであると知ったのは、ついさっきのことであつた。その行為が何のためなのかは、いまだに分からないけど。

「あ、ごめんごめん」

彼女は、佳奈というわたしのクラスメイトだ。お母さんに貸してもらつたという真っ黒い喪服と、染め直すのが間に合わなかつたというウェーブ掛かつた茶髪が不釣り合いで、笑える。

それにしても、佳奈はルックスもさることながら、雰囲気も場違いだ。こんな場所にもかかわらず、声がばかでかい。さつきもわたしの名前を大声で叫んだ時、会場中の視線がわたしに集中するのを痛いほど感じた。特に尋常じゃなかつたのが、坂上くんのご両親。すごい速さでわたしの方に顔を向けたかと思うと、睨み殺さんばかりの視線で見つめていたのである。ちよつと恐かつた。

で、何だかんだあつて、わたしが灰をつまんでおでこに近付ける番になつた。後で知つたんだけど、この行為は“ご焼香”って言うらしい。坂上くんの霊を慰めるためにするのだと言う。昔の人の考えることつて、よく分らない。

ふと、写真の中の坂上くと目が合つた。

もう、この顔を見ることはなくなつてしまふのだろうか。

いつか、坂上くんのことを忘れてしまふ日が来るのだろうか。

わたしにも、忘れられる日が来るのだろうか。

考えただけでも気が滅入つてしまひそうだった。ああ、虚しい。虚しさに押し潰されそうになつてしまつたわたしは、急いでご焼香を済ませた。一秒だつて坂上くんの前にいたくはなかつた。だけど、何だか坂上くんのぶすつとした顔が、わたしのことを睨み続けているみたいで気味が悪かつた。だからわたしは、心の底から彼の冥福を

祈った。

成仏してください、坂上くん。

.....

島田正美。それがわたしの本名。

自分で言うのも変だけど、普通の高校に通う、普通の女子高生。昨日はちよつと非日常的なことを体験したけど、今日はいたって普通の朝だ。ん？ 朝？ 朝と呼ぶにはもう遅すぎる時間だった。鳥のさえずりももう聞こえない。お天道様は完全に昇ってしまった。こんな時間まで眠っていられるのも、日曜日のおかげである。

昨日はお葬式。で、今日はもう予定がない。

坂上くんが死んでから、今日で二日が経った。時間の流れは誰がどうしたって止めることはできない。そして、時の流れは残酷だ。少しずつ、少しずつ人々の記憶を消してゆく。それが楽しいことだろうか、悲しいことだろうか。

始めは濃かったはずの色の水も、水が増されるに従って薄まってゆく。水道から落ちる細い水の流れが、少しずつ薄めてゆく。これが時間の流れだ。

そうして人は忘れられる。ああ……虚しい。

.....

薄目を開ける。日差しが瞳に差し込み、わたしは思わず目を細めた。

「やっと起きたの」

時計へと目をやる。午後十一時半。

正午前までに起きられたのは、いつもなら早い方だ。むしろ褒めてもらいたい。

「まったく、いつまで寝てる気だったの？」

いや、そう言われても。あえて言うなら、起きるまで。

「まあいいや、とにかく」

……ちょっと待つて。

「ん？」

あんた……誰？

わたしは布団を引きはがし、身を起こした。

そして首をキョロキョロと、公園を歩くハトみたいに動かす。目に入るのはどれも見慣れたものばかり。

白い壁紙、本棚、その上にオーディオ、机、電気スタンド、クロゼット、観賞用サボテン……。

だけど、どこを探しても、声を発するような生き物　人間の姿はない。

「だ……誰よ!？」

「あ、自己紹介がまだだったね」

「自己紹介？　てかあんた、今どこにいるのよ!？　隠れてないで出てきなさい!」

わたしは声のする方を向こうとする。

だが、それがどこなのか、まるで見当が付かない。



上からのようでもあれば、下からのようでも、右からのようでもあれば、左から聞こえる気もする。わたしは、磁力の狂った森の中へと迷い込んでしまったような錯覚を受ける。

「どこ!？」

ただ、何となく感じるのは、その声は、頭の奥から聞こえてくるような気がする。本当に何となくだけ。

「いやあ、どこと言われても……」困ったような声。

「たぶんだけど、僕の姿は君に見えないんじゃないかな?」

はあ? 何を言ってるの?

「ほら、今僕が何をしてるか分かんないでしょ? 君の目の前にいるんだけど」

目の前? わたしの目の前の空間には何もないし、あえて言うなら、わたしの目線の先には一株のサボテンがあるだけだ。いや、あれはサボテンだし。サボテンが喋るわけないし。

「正解は、アイーンでした。分かんなかったでしょ?」

アイーンをしてる奴の姿なんてこれっぽっちも見えないわよ。てか、ふざけないで。何がアイーンよ。

「ね、やっぱり見えないみたい」

……ちょっと待て。

「え？」

こいつ、どうしてわたしが何も喋ってないのに話ができるんだろう。わたしが口に出して言っていないのに、普通に返事をしてくる。

「ああ。まあ、その辺はフィーリングで？」

いや、意味が分からないし。

ただ一つ分かるのは、この声　声と呼べるのかは微妙であるがどこかで聞いたことのあるような気がする。

「まあさ、とにかく話を聞いてくれよ」

寝ぼけた頭で、ふと思った。  
なるほど。これは夢なんだ。

夢なら何でもござれだ。空を飛べようが、瞬間移動ができようが、透明人間になれようが、誰も文句は言えまい。

そう思ったわたしは、もう一度布団へと潜り込んだ。

確かに夢なら何でもいいけど、こんな不快な夢はチェンジチェンジ！　無理矢理にでも違う夢にしてしまおう。

「おーい、また寝る気？」

はいはい、そうですよ。

姿の见えない誰かが心に話し掛けてくるなんて、例え夢であつてもいい気分じゃあないから。

「まったく……じゃ、起きたらちゃんと話を聞いてね？」

はい、分かりましたよー。

布団の中でわたしは目を閉じる。泥沼の中へと沈んでゆくように、ゆつくりとわたしの意識は夢の中へと旅立っていった。ん？ 元々これが夢なのだから、厳密には何て言えばいいのだろう？ 夢のまた夢……違うな。

そんなことを思いながら、わたしは再び眠りに就いた。

……………

薄目を開ける。日差しが瞳に差し込み、わたしは思わず目を細めた。

「やっと起きたの」

時計へと目をやる。午後三時。

「まったく、いつまで寝てる気だったの？」

いや、そう言われても。あえて言うなら、起きるまで。

「まあいいや、とにかく」

……………ちょっと待って。

「ん？」

あんた……まだいるの？

「当たり前でしょ」

びっくり箱の中の人形のような勢いで、わたしは布団から飛び起きた。そして、再びキョロキョロと部屋を見渡す。

「って、何度同じことするのさ？ あはは」

これはたまげた。わたしはまだ同じ夢を見てるのだろうか。だとしたら、ずいぶんと芸の細かい夢だ。

「いや、だから夢じゃないみたい」

夢じゃない？

「うん」

じゃあ、現実ってこと？

「その通り」

うそ。

「嘘じゃないよ。試してみれば？」

わたしはほっぺを思い切りつねってみた。

「いででで！」

「ね？」

痛い。

……ということは。

「何度も言ってるでしょ？ 現実なんだよ」

現実……。

「やっと気付いた？」

へえ、これが現実なんだ。この、姿も形も見えない人の声が心に聞こえてくるのが現実なのだと言っ。ああ、事実は小説よりも奇なりとは、よく言ったものだなあ。

「あはは」

分かったわよ。取りあえず現実ってことにしといてあげる。

「うん、だいぶ時間が掛かったけどね」

でも、はっきりさせておきたいことがあるの。

「何？」

あんた、何者？

「僕？」

うん。

「正美だよ」

正美？

「うん」

ふざけないでよ。正美はわたしの名前よ。

「いやいや、ふざけちゃいないって」

どういう意味？

「正美って名前は、君だけの持ち物じゃないでしょ？」

まあ、それもそうだけど。

世の中に同じ名前の人がいることくらい、わたしにも分かる。  
不意に、わたしは不思議な感覚を覚え始めた。この謎の声と会話をしているうちに、過去にも何度か、こうして話をしたことがあるような……そんな気がしてきたのだ。

「僕の名前は」

それは、彼の次の言葉を聞いた瞬間に分かった。その言葉が鍵となって、一つのドアが開いたのだ。

「坂上正美、だよ」

.....

わたしはそれを見た時、大して驚かなかった。だって、わたしの行為はただの確認だったから。それは、スケルトンの箱でできたび

つくり箱を渡されたようなものだった。開ける前に一回驚いてしまったから、開けた時にはビックリはないのだ。

わたしが机の奥底から取り出したのは、一枚のプリント。クラス名簿だ。わたしのクラスメイトの電話番号、住所、そして、名前が記録されている。

彼は、確かにわたしのクラスメイトだった。

2年3組21番、坂上正美。

わたしと同じクラスに、わたしと同じ名前の生徒　しかも男子が　いたなんて、今の今まで知らなかった。生前の坂上くんとはるかに話をしたこともなかったし、彼の名前がわたしと同じだったなんて、本当に気にも留めなかった。昨日のお葬式の時も、そんなことまで気にする余裕はなかった。

「まあ、改めてよろしくね。島田さん」

坂上くん　と名乗る声　は、わたしの動揺が治まるのを待っていたのだろうか。

混乱し続けた頭の中がやっと静まり掛かったところで、また声を掛けてきた。

いや、だから。全然意味が分らないんだけど。

「何が分らないの？」

全部よ、全部。死んだはずの坂上くんの声が何で聞こえるのか。どうしてそれがわたしののか。そして、「よろしく」ってどういう意味？

「ああー、そんなに一度に聞かれても……」

うるさい。とにかく答える。

「う、島田さんって……けっこう恐い人だったんだね」

何それ？ それはお互い様よ。わたしだって、坂上くんがこんなに図々しい人だとは思わなかったわよ。

「ず、図々しい？」

そうよ。だって人が眠ってる時に入ってくるなんて、チカンじゃない。変質者よ。

「いや、だからそれは……」

何よ？ 何か理由でもあるってわけ？

「あー、一から話した方がよさそうだな……」

そうしてもらおうじゃない。せつかくの日曜日をこんなことにされたんだから。

ちゃんとした説明をして。

「えーっと、僕が死んじやったことは知ってるよね？」 あっさりと坂上くんは言った。

し、知ってるわよ。てか、昨日葬式に行っただから。

「だから、今の僕が何なのか、自分でもよく分からないんだよ。僕



は正美。でも、僕は死んだ。そのことは自覚してるんだけど……じやあ、今の僕は何なんだ、って感じで」

確かに、科学的にはあり得ない存在よね。今のあなたが、本当に坂上くんだとするならば。

「うん。まあ幽霊ってやつじゃないかな？」

ず、ずいぶんあっさりと言うのね。

「ま、それ以外の言葉が見つからないし。俗っぽい表現だけど」

それもそうね。

よし、一つ目の謎が解けた。

死んでしまったはずの坂上くんがわたしに話し掛けられるのは、彼が幽霊になったから。

って、それでいいのだろうか。

「……ヨシとしよう。先に進めないよ」

うーむ……。まあ、話を進めて。

「で、僕は記憶が曖昧なんだよ」

記憶が曖昧？ どういうこと？

「うん。例えば……自分が“坂上正美”だったことや、島田さんと同じクラスだったとか、そういうことは覚えてるんだけど」

うん。

「どうして死んじゃったのか。それと、死ぬ前に何をしてたのか……どうしても思い出せないんだよ。プツリと記憶が途切れてるわけじゃないんだ。途切れたその断面は曖昧で、僕はどこから記憶を無くしたのか分からないんだよ」

記憶喪失……なのかしら？

「あは、記憶以外のものもいっぱい喪失しちゃったけどね。身体とか」

いや、笑えないわ。

「どうして死んじゃったのか、本当に分からないんだ。何となく、僕は“死んだ”ってことが漠然と分かるだけで、死んだ原因も、実はよく分からないんだ」

ああ、それなら知ってる。又聞きの又聞きになっちゃうけど、自転車に乗ってる時に曲がってくるトラックに巻き込まれた、って言うってたわよ。

「トラックか……」

何か思い出した？

「全然。だって、道を走ってた記憶もないし」

うーん。じゃあ、この事は後回しにしましょ？

「そうだね」

じゃあ二つ目の謎。理由は何にせよ、坂上くんの意識はここにある。でも、何でわたしの所にやって来たのよ？ 親御さんとか、仲の良かった男子とかの所に行けばいいじゃない。

「あー、それは僕も謎なんだよね」

な、何ですって？

「さっきも言ったけど、記憶がどこで無くなってるか曖昧なんだ。それで、僕、気が付いたらこの部屋にいたんだよ。そのときは、自分が何であるのかよく分からなかったけど……」

うん。

「君の寝顔を見た途端、ああ、僕は坂上正美で、この人は島田さんなんだ、ってことが蘇ってきたんだ」

……何でわたしなのよ？ そもそも、なんでわたしの部屋にあなたがいるの？

「よく分からないけど……」

けど？

「ここからは僕の推測だから、確証はないけど」

いいわよ、聞かせてみなさい。

「死ぬ前の僕には、この世に未練があつたんじゃないかって思う」

み、未練？

「うん。だから、現に成仏できてない」

うーん。そういうものなのかな？

「突然だけど島田さん。君、葬式で名前を呼ばれなかったかい？」

え、本当に突然ね。

「あ、ごめん」

……確かに呼ばれたわ。佳奈って覚えてる？ あの派手な子よ。あの子に大声で呼ばれたわ。恥ずかしかった。坂上くんのご両親にもすごい睨まれ……。あつ。

「ん、どうしたの？」

わたしは思い出した。あのときの、坂上くんのお父さんの驚いたような顔。そして、坂上くんのお母さんの睨み殺さんばかりの視線を。

死んだ息子の名前を呼ばれたら、そりゃあビックリするだろう。

な、何でもないわ。それより、それとこれがどう関係があるの？

「うん、僕が思うに……。島田さんと僕の名前が同じだったことが大きな意味があるんだ」

わたしと坂上くんの名前が？ それ、どういう意味よ？

「これは僕の推測だけど……」

分かってるわよ、早く言いなさいよ。

「魂だけになった僕は、いまだに未練によって成仏できないで彷徨っていた。自分の身体を求めて、葬儀場の辺りをね」

あの葬式の最中。わたしの頭の上を、坂上くんの幽霊がうろつろしていたのだろうか。

坂上くん自身その時の記憶を失ってしまってるらしいので、確かめようがないけど。

「だけど、僕の魂が収まるべき身体は、もう使えないものになってしまっていた」

そうね。それが普通よ。だから魂は天に召されてしまうのよ。

「そう。仕方なく諦めようとした僕だけど……」

だけど？

「自分の名前を呼ばれたから」

「正美！」と大きな声で叫ぶ佳奈を思い出す。確かにあのとき、心そこにあらずだったわたしも、呼び寄せられるように我に返ったのだ。

「君に、取り憑いてしまった」

と、取り憑く？

「うん。こんな話を聞いたことがある。名前つてのはすごく強い力があつて、時には何か　例えば、霊とか魂とか　を呼び寄せ、それをとめておくことができるらしい。名付けっていうのは、混沌とした世界から切り離す作業らしいんだ。ほら、赤ちゃんが生まれたら、まず名前をつけるでしょ？」

分かるような、分からないような……。

「まあ、僕の推測だからさ。確証は全然ないよ。でも、こうでも考えないと、僕がここにいる意味が分からないんだよ」

それで？　どうして取り憑こうなんて思ったわけ？　当時の坂上くんは。

「たぶん、取り憑くつもりはなかったんだと思う」

どういう意味？

「僕の魂が収まるべき身体はなかったけど、収まるべき名前だけは……そこにあつた。普通、名前と身体は一緒の運命だから、身体が死ねば名前も死ぬ。そうやって普通の人は消えてゆく。だけど、僕の場合は　」

わたしの名前、つまり、正美という名前が、たまたまそこにあつた……。

「うん。そして僕は素直に自分の名前へと帰ろうとした。だけど当然のことながら、それは僕の身体じゃなかった。僕が支配できる身体ではなかった。かと言って、このまま無に消えてしまうには惜しい。何らかの未練があったから」

そ、それって。

「そう、だから僕は、こんな中途半端な状態で現世に残ってるんじゃないかな？」

じよ、冗談じゃないわよ。出て行きなさいよ。気安く居座らないで！ わたしの身体は、公園のベンチじゃないのよ？

「それが、無理みたいなんだよ」

な、何でよ？

「何度も試したけど、僕は君から離れることができないんだよ。この部屋の中…… もっと言うなら、君から半径二メートル以上外に出ようとすると、何かに引っ張られてるみたいになって離れられないんだ」

うそ。

「この期に及んで嘘は付かないよ」

じゃあ何よ？ 取り憑くだけ取り憑いといて、後は離れられないってこと？

「そうなるかな」

ふ、ふざけないで。じゃあ、わたしは一生坂上くんにつきま  
とわれなきゃいけないわけ？

「それは……僕にとっても辛いんだよなあ」

他人事みたいに言わないでよ。わたしは坂上くと違って、  
まだまだ前途ある身なんだから！

「それはきついお言葉で……」

わたしは愕然とした。これからのわたしの人生、一体どうなっ  
てしまうのだろうか。

わたしがこれから歩むであろう道。それを一人のクラスメイトが、  
思い切りねじ曲げているのを見た気がした。少し涙が滲んできた。

坂上くん……お願いだから出てってよお。

「いやあ、だから僕も、できればそうしたいんだよ。早く成仏した  
いんだよ」

どうして？ 死んじやってからもこうしていられるなんて、  
何だか、すごくズルいような気がするのに。

「……まあ、そんなにいいものじゃないよ」

そうなの？

「試してみたけど、僕はこの世界のものに手を触れることができな  
い。ぼんやりとしか感じることもできない。僕の声は、たぶん、君



以外には届かない」

わたしに坂上くんの声が聞こえるのは、取り憑かれてるからなのかしらね。

「たぶん、そうだと思う」

うーん。

「僕には会いたい人もいるし、もう一回だけやりたいこともある。そりゃ、未練なんて探せばいくつでも見つかると思う。だけど、もういいんだ」

どうして？

「例えば犬じゃないけど、腹ぺこの時に『おあずけ』で食べられないことほど辛いものってないだろう？　つまり、僕は永遠に『おあずけ』なんだよ。そう考えたら、早くこんな世界からは抜け出したい。心の底からそう思うよ」

坂上くんの言葉を聞いてるうちに、だんだん坂上くんの置かれてる不幸に気が付いてきた。そして　死ぬのはもちろん辛いことだろうけど　坂上くんのような“半分生きてる”状態がどんなに恐ろしいのか、わたしにもおぼろげながら分かってきた。

こうやって話ができるのに、わたしと坂上くんが生きているのは、全く別の世界なのだ。

だったら、坂上くんの魂をこの世に引きとどめさせた“未練”ってのは何だったのだろう。

坂上くんが成仏できずにいるのは、その“未練”の所為のはず。こんなに辛い状況を乗り越えてでも坂上くんがやり遂げたかったのは、

一体どんなことなんだろうか。

あ、そうか。

「お、察しがいいね」

そうよ。その“未練”がなくなれば、坂上くんも成仏できるはず。

「そう、僕はそれが言いたかった」

なるほど、つまり。

「その時まで『よろしく』って言ったんだよ。僕は」

そうか、これで二つ目と三つ目の謎が解けた。

偶然、わたしと坂上くんの名前が同じだった。そのおかげで、魂だけになった坂上くんは、わたしに取り憑くことができた。まるで非科学的だけどね。

だけど、どうして取り憑いたのかを坂上くんは覚えていない。記憶を失ってしまったようだ。誰か他人に取り憑いてまで、この世に固執した理由が分からない。

ということとはつまり、わたしから坂上くんを追い出すためには、その理由を探せばいいんだ。

「よ、ご名答！」

て、呑気に言わないでよ。

「あはは、ごめん」

つまりこうね？ 坂上くんがこの世に残した“未練”。それをわたしが調べてあげれば、坂上くんは成仏できる。

「うん。そういうことになると思う」

驚きと戸惑いという闇の中、ようやく一筋の光が見えたような気がした。それはごく頼りなく細い光だったけど、真っ直ぐに前に向かって指していた。これを頼りに進んでいけば、きっと出口が見つかる。そう思った。

……はあ、それにしても、いろいろと疲れた。

「まあ、限りなく非日常的な話だからね」

ね、一ついい？

「何？」

坂上くん、わたしの声が聞こえるのよね？ 言葉に出してない声も。まあ、心の声とでも呼びましようか。

「ああ。まあ、何となくだけどね」

どんな感じに？ 全部のことが手に取るように分かつちゃうの？

「いや、それはないな。耳をすませば聞こえてくるような感じだよ。生きてた頃には、手のひらを丸くして耳に当てたりしてたけど、あれをする感じかな」

じゃあ、あんまりわたしの中に入ってこないで。お願いだから。

「うん、そのつもりだけど」

良かった。坂上くんがいい人で。

「取り憑くような奴が、いい人かな？」

坂上くんの言葉に、わたしはあははと笑った。

でも、やっぱり不公平よね。

「え？ 何が？」

わたしには、坂上くんのことから分らないんだから。

見えないし、坂上くんが黙り込んでいたら、そこにいるのかすら分からなくなっちゃう。

「ああ、そうだね」

じゃあ、ルールを決めましょ。

「ルール？」

いつまでになるか分かんないけど、これから一緒に暮らすんだから。ルールくらいは必要でしょ？

「なるほど」

わたしが坂上くんに用がある時は、わたしの方から呼び掛けるわ。だから、むやみにわたしの心の中を覗かないでね。

「分かったよ」

本当？　ずいぶんと物分かりがいいじゃない？

「うん、だって島田さんの機嫌を損ねたら、調査をしてもらえなくなっちゃう。そしたら僕、成仏できないじゃん」

ぷっ、おかしい関係よね。わたしたち。坂上くんは自分を消してもらったために気を遣ってるけど、坂上くんが消えないと困るのは、わたしだって一緒なのよ？

「あは、世界中で一番おかしい関係だろうな」

じゃあ、わたしから話がある時は、坂上くんを呼ぶね。

「あ、ちよつと声を出してくれない？」

声？　別にいいけど。

「何？　坂上くん」

「あ、やつぱり」

「え？　何が？」

「島田さんが心の中で思うより、言葉にしてくれた方がよく聞こえるや」

へえ、不思議ね。今までに起きた数多くの不思議の前では、

かすんで見えるけど。

「やっぱり、なるべく島田さんの心の中を覗きたくないからさ、用があるときは言葉に出してよ。そっちの方が僕も気付きやすいと思うから」

「分かったわ。……でも、周りから見ると独り言を言ってるように聞こえるのよね。わたし」

「ああ、それがあつたか」

「二人きりの時は言葉で話せるけど、周りに人がいる時は心で話しましょ」

「そういうことにしておこうか」

「ええ」

言葉と心。二通りのコミュニケーションがわたしたちには用意されている。まあ、坂上くんは言葉の方は使えないけど。

「でも、そうになると問題が一つあるな」

「何？」

「人が周りにいる時は心で話さないといけないってことは、僕はずつと島田さんの心の声に耳をそばだててないといけないってことでしょ？」

「あ」

「そうになると、さつき決めたルールが守れなくなっちゃう。矛盾だよ」

「うーん……」わたしは少し考え込んだ。「あ、簡単よ」そしてすぐにひらめいた。

「え？」

「人がいる時も、言葉で呼び掛ければいいのよ。その言葉を合図に会話を始めれば。もちろん心の方でね」

「そっか、なるほど」

「名案でしょ」

「あー、でも一つ問題があるな」

「何よ？ ケチ付ける気？」

「ほら、例えば教室とかで僕を呼びたい時さ、『坂上くん』とか言葉に出しちゃうと、みんなが驚くような気がするんだよな」

「あ……」

一理ある。

「じゃあ、合い言葉を決めましょ。その言葉をきっかけに心の会話を始めるってのはどう？」

「合い言葉か、いいね」

何にしようかな。別に何だっていいんだけど。

ふと窓の外に目をやると、今日はとてもいい天気だった。透き通るような青空に、真っ白い雲が二つ三つ流れていた。こんな天気の日にお昼まで寝てるわたしって、やっぱり罰当たり？

「じゃあ」

よし、合い言葉決定！ 安直でいいのよ、こんなものは。

「わたしが『本日は』って言うから」

「ふむふむ」

「坂上くんは『晴天なり』って返して」

「なるほど、それが心の会話を始める合図だね」

ええ。

「よし、分かった」

取りあえず一段落が付いた。わたしはプライバシー権を獲得することに成功した。坂上くと決めたルールによって、心の中を覗き見られることはなくなったと思う。まだやらなければいけないことも、分らないこともたくさん残っているが。

うーむ、じゃ、テスト。

「本日は？」

すぐさま坂上くんの声　大気の振動によって伝わるのではなく、ダイレクトに心に響く声が返ってくる。

「晴天なり」

おっけー？　坂上くん。

「うん、こんな感じで会話始めればいいんだね。人前では」

そうね。

「島田さんの声が聞こえたらすぐ返事をするよ」

よろしくね。

「おう」

とまあこんな感じで、坂上くんの霊に取り憑かれたわたしの生活は大きく変わってしまいそうだった。いつまで続くのか分からないけど、昨日までとはまるで別の生き方をすることになるだろう、わたしは。



でも、それは坂上くんにとっても同じことか。死んだことによつて、過去とは全く違った生き方を始めることとなった。自分が生きてきた足跡を辿りながら、坂上くんは何を見つけるんだろうか。

……よし、今日はもう寝よう。明日のことは明日考えよう。

わたしは布団へと潜り込む。そんなわたしの行動を見ているのだから。坂上くんの呆れた声が聞こえた。

「て、よく寝る子だね」

うるさい。明日からは頑張るわよ。

「……ごめんね」

へ？

「そう言えば、まだ謝ってなかったよ。本当にごめん。僕がどうして取り憑いてしまったのかは思い出せないけど、島田さんには悪いことしたなって思ってるよ」

べ、別にいいわよ。何だか、面白いことになりそうだし。

「はは、ホントに気楽な意見だな」

そんなこと言うと、調査してあげないわよ。

「ひえ」

ふふ、飼いきれね。

「……もう死んでるけどね」

坂上くんの笑えないギャグを最後に、わたしたちは会話をおしまいにした。明日からは学校が始まる。学校に坂上くんを連れて行ったら、みんなはどういう反応をするのだろうか。もちろん、坂上くんの姿はみんなに見えないけれど。

布団の中でわたしは、「くくっ」と笑いをこらえた。  
かくして、わたしたちの奇妙な共生生活はスタートしたのだった。

## 第一話 正美、取り憑かれる（後書き）

初めまして。ここまで読んでいただき、誠にありがとうございます。  
感想などいただけると非常にありがたいです。

## 「正美、登校する」

朝になった。今日は月曜日。今日から学校が始まる。

月曜の朝、目覚めの時。一週間の中で一番気が滅入る瞬間だ。

わたしはゆつくりと起き上がる。そして大きなあくびを一つ。二つの瞳に涙がたまって、視界が雨の日の窓ガラスのように滲んで見えた。

ベッドから立ち上がり、カーテンを開ける。すると、とっさに差し込んでくる朝の光。体温がじわつと暖められる感じがした。

今日も朝からいい天気。

「本日は……」わたしはつぶやく。

すると、待ってましたと言わんばかりに、

「晴天なり」

わたしの心は、彼の声によって軽く振動した。  
心の中で、わたしも彼に言葉を投げ返す。

おはよ、坂上くん。

「おはよう」

いよいよね、学校へ行くの。

「そうだね」

どう？ 何か感想はある？

「感想といわれてもね……」

まあ、複雑な気分つてところね。

「そうだね。まあ初めてのことだから、死んじゃうのって」

ははは、坂上くんらしい意見ね。

「そうかな？」

わたしはクローゼットを開き、制服をハンガーごと取り出した。そして、パジャマのボタンに手を掛ける……。

じゃあ、今からプライベートね。

「了解」

それっきり、坂上くんの声はしなくなった。

これは昨日のうちに決めておいた約束。

わたしがお風呂に入る時、トイレに行く時、そして着替える時

これが大問題であることに気付いたのは、夜になってからだった。

我ながら間抜けだった。いくら姿が見えないからと言って、声

が聞こえる人にそれらの様子を見られるのは耐え難い。そりゃ、わ

たしだってお年頃の女の子ですもの。

さて、どうしよう。

そう考えたときに役立つたのは、例の合い言葉だった。

どうやら坂上くんは、強く意識をしないとわたしの声も姿も分からないらしい。だから悪いけど、わたしが“プライベート”な時は意識を消していてもらおう。そういうことになったのだ。

わたしは着替えを終了する。

ただの寝ぼけた島田正美から、明日葉高校2年3組24番島田正美へと変貌を遂げたのだ。なんちゃって。

ここで登場するのが、合い言葉。

「本日は……」

ややあつて、

「晴天なり」坂上くんの声。

はい、お待ちどおさま。

「いやいや、たいして待ってないよ」

いやね、形式上よ、形式上。

「何だ」

わたしが気を遣わなくちゃいけないなんて、そんな不条理なことはないでしょ？

「それもそうだね」

わたしは部屋のドアを開ける。  
いつものドア。

今まで何百回と開けたドア。

でも、今日は違う。

だって、坂上くんと一緒に開ける、初めてのドアだから。

「……何か詩的な表現だね」

うるさい。

……

わたしは支度を済ませて家を出た。玄関を出るとき、お母さんが珍しく表まで見送ってくれた。今日に限ってどうしたのかな、って思ったけど、お母さんの言葉を聞いてすぐに納得することができた。

「正美……何て言ったらいいのか分からないけど、あまり気にしちゃ駄目よ」

「へ？」

「クラスメイトが亡くなったんでしょう？ 気にするなって言い方は変だけど、動揺してるのはあなた一人じゃないのよ」

ああ、なるほど。坂上くんのこと、わたしが思い詰めてるんじゃないかと思ったんだ。お母さんったら、心配性なんだから。

「何かあったら、何でもお母さんに話してね。相談に乗るから」  
「う、うん」

でも、そんな気遣いが嬉しかったりする。

「じゃ、行ってくるね」  
「……気をつけてね」

わたしは駆け出した。

学校までの通学路。徒歩で約7分。自転車を使えばもっと早いん

だけど、うちの学校の規則で、家が近い人は自転車は使ってはいけないらしい。まあ、遅刻しそうになったらそんなのに構ってられないけど。

しばらく歩くと、またわたしの中で声が聞こえてくる。

「いい母さんだね」

やっぱり聞いてたんだ。

「あ、ごめん」

いや、そういう意味じゃないけど。昨日言ってたわよね？

「何を？」

心の声よりも、口に出した声の方がよく聞こえる、って。

「ああ、確かにそうだ。そう言っただよ」

だから、わたしとお母さんの“声”での会話は、坂上くんに聞こえるんじゃないかなって思ってた。

「なるほど。実際、島田さんの声はよく聞こえたから」

うーん、これは大きな収穫ね。

「どつという意味？」

例えば、わたしが他の人から坂上くんについての情報を聞くとするじゃない？ そんな時、いちいちわたしが坂上くんに伝えな



くても、坂上くんが反応できるのよ。

「あ、そうだね」

わたしが通訳をする手間がなくなるわけね。これは大きいわよ。これから、どんどん坂上くん情報を集められる。

「あはは、探偵みたいだ」

名探偵、正美ちゃんね。

「じゃあ僕は有能な助手つてところかな？」

いや、坂上くんは違うわよ。

「へ？」

だって、坂上くんは依頼主でしょ？

わたしは朝日で満ち溢れているいつもの通学路を歩き続けた。家から近いからなんて理由で決めてしまった高校までの道のり。だから今までは、誰かとおしゃべりをしながら歩くなんてことはなかったけどね。

ねえ坂上くん。

「何？」

確か、断片的な記憶しかないって言ってたわよね。ちょっとテストしましょう。

「テスト？」

ほら、坂上くんがどれくらいのことを覚えているのか、とか。もしかしたら何かヒントが見つかるかもしれない。未練に思うくらいなことなら、記憶に残ってる可能性もあるでしょ？

「ああ、なるほど」

じゃあ、あなたの名前は？

「坂上正美」

うむ、聞くまでもないけどね。

「いや、あながち……そうとも言いきれないんだよね」

ほえ？

「今は自分のことを“坂上正美”だって理解できる。でも、始めの方はそうじゃなかった。自分自身の存在が、まったく分からなかったんだ」

ああ、確かそんなこと言ってたわよね。わたしの寝顔を見ているうちに、わたしのことと自分のことを思い出したって。

「そうなんだ。もしも何も分からなかったら、僕は島田さんに話し掛けてなかったと思う。どうして思い出したのかは分からないけど……」

まあ、不思議なことも次々と起こると慣れちゃうものね。」「  
どうして?」なんて思ってたらキリがないわ。

「そうかな」

そうよ、そんなもんよ。だってそうじゃない? 今、わたしが  
生きていることだって……」「どうして?」なのよ。説明なんかで  
きないわ。この地球ってものが宇宙に存在しているのだって、「ど  
うして?」でしょ? 頭のいい人は一つの答えを知っているのかも  
しれないけど、「どうして?」だけは消えることがないと思うわ。  
答えを見つけるってことは、次の「どうして?」も一緒に見つけち  
やうってことだから。

「なるほど、島田さんって面白いね」

お、面白い?

「だってさ、幽霊に取り憑かれたっていうのに……むしろ楽しんで  
るんだもん」

た、楽しんでないわよ。

「あはは、嘘だ」

うるさい! そうだったら、坂上くんも相当おかしな人よ。  
死んじゃったっていうのに、ずいぶんと明るくふるまえるものね。

「そう来たか……まあ、開き直っちゃったのかな? 落ち込んで  
も何の意味もないからね」

なによ、楽しんでるのは坂上くんも一緒じゃない。

「はは、そうだね。何だかんだ言って、僕たち気が合うかも」

うむう……。

「まあいいや。それよりも、話が脱線してる気がするんだけど」

そつれもそうね。じゃあ……坂上くん。

「はい」

日本の首都は？

「……あれ？」

ヒント、“と”から始まる都道府県。

「と、と、と……栃木？」

ざんね〜ん。答えは東京よ。

「あ、東京！ 何で忘れていたんだろう……」

栃木は覚えているのにね……。じゃあ次の質問。信号機の色で、“止まれ”の合図は？ あ、ほら、ちょうどそこに信号があるじゃない。

わたしは歩行者用の信号を指差した。そこでは、赤い色をしたおじさんが“気をつけ”みたいな格好をしている。

「……うーん？」

ヒント、赤か青のどちらかよ。

「青だ！」

当てずっぽうでしょ？

「……ごめん」

“青は進め、赤は止まれ”。小学校で教わらなかった？

「あ、そうだ！ 思い出した」

ホントに？

「ホントに。歩行者用の信号にはないけれど、“黄色は注意” だろ？」

正解。本当に思い出したみたいね。

「うん」

分かったわ。坂上くんは、記憶をなくしてるわけじゃないのよ。

「どっいつ意味？」

わたしが答えを言うとすぐに思い出せるように……ちょっと

したきっかけさえあれば思い出せているでしょ？　だから、完全に記憶を失ったわけじゃないってこと。たとえるなら……引き出しの鍵をなくしちゃったみたいな状態かしら？

「なるほど……引き出しの中身には異常なしってことだね」

そ、つまりはそういうことね。

坂上くんがわたしに取り憑いた原因　坂上くんが残した未練。それを理解するためには、その引き出しを開けるための鍵が必要ということ。その鍵を探し出すことが、わたしたちの取りあえずの目標となったわけだ。

「正美、登校する」（後書き）

ちよつと1話あたりを短めに見ました。

「正美、慌てる」

ほら、学校が見えてきたわよ。

わたしは前方を指差す。

両側に住宅街を臨む先には、わたしが通う高校　私立明日葉高校がそびえ立っていた。最近設立された新設校なのだが、別に超進学校ってわけでもスポーツに力を入れてるってわけでもない。平凡でなんにもないわたしの生き方を象徴してるような学校……。あ、こんなこと言っちゃうと失礼かな。良いところもたくさんあるのよ？　ほら、家から近いとか。

じゃあ、また質問ね。坂上くんが通っていた高校の名前は？

「分かった、明日葉高校だ」

お、正解。

「やった」

ここまで至る道ので、わたしはいくつも坂上くん質問をした。そして分かったことは、坂上くんが覚えてる記憶と覚えていない記憶との境界線が曖昧だということだった。日本の首都は覚えていないのに、埼玉県の県庁所在地は覚えていた。担任の先生の名前は分からなかったけど、数学担当の教師については、奥さんの名前まで覚えている。

今の高校名も加えると、正解率は30%くらいだろうか。野球の打率くらいだ。



教室に行ったら、もっと多くのことを思い出すかもね。

「そだね」

思えば……わたしたちがこれから歩こうとしてるのは、坂上くんがかつて歩いていた道なのよ。だから、坂上くんの落とし物がいっぱい見つかるはず。きっとね。

「なるほど。なんだか楽しみだ」

あはは。教室に行けばクラスメイトにも会えるわよ。坂上くんの未練の引き出しを開ける鍵、もしかしたら誰かが持つてるかもしれないわね。

「それを願いたいね……。あ、あとさ、島田さん」

ん？ 何？

「えーつとね、なんて言うか……」

どうしたの？ 何か言いづらそうね。

「こう言うのも変だけど、島田さんがあんまり明るいとか……みんな戸惑うんじゃないかな？」

え？

ちょっと考えてわたしは気付いた。

鏡を見なくても分かる。今のわたしの表情は、とても3日前にクラスメイトを失った女の子のものではないだろう。

坂上くんがわたしの中にやってきてからずっと忘れていたけど、坂上くんは死んでしまったんだ。

なるほどね、みんなへの配慮も考えなくちゃ。

「そうそう。……ま、当の本人の僕が言うのも変だけどね。『坂上くんが死んじゃったんだから、もっと慎む態度でいなさいよ』って」

あはは、坂上くんの所為よ。わたしが笑っちゃうのは。

「そっか。やっぱり僕たち、変なコンビだね」

改めてそう思うわ。

わたしが苦笑いを浮かべていたとき、向こうの方で手を振っている女子生徒がいるのに気付いた。

ほら、さっそくお出ましょ。鍵を持ってるかもしれない候補者がね。

わたしは彼女の元へと走り寄る。校門のところであたしを待っている。

吉崎佳奈。ウェーブ掛かった茶髪は今日も健在だった。どこにでもいそうな、いわゆる今時の女子高生。ただ、ひとくりにされるのは大嫌いらしい。わたしにはそれがどうしても分かんない。みんなが持つてるものとか、流行ってるものが大好きなのにね。

「正美、おはよ」彼女はスーパーボールが弾むような口調で言った。「おはよ」

「ねー、ビックリしちゃったよね」

たぶん坂上くんのことだろう。

「う、うん」

「なんてゆーか、まー、ね」

「何？」

「んー、何でもない」

いつも思っただけど、ホントにこの子との会話には脈絡がない。  
まあ、複雑な心境は分からなくもないけど。

「本日は……」

「へ？」

わたしのつぶやきに、佳奈は虚を突かれたような顔をする。

「ん、何でもないの」

あなたに対して言ったんじゃないから。  
佳奈はまだ解せない表情をしている。

「……晴天なり」少し遅れて、坂上くんの声が聞こえた。

坂上くん？　いますかー？

「ちゃんというよ」

いつもより返事が遅かったから。

「だって、島田さん他の人と話してたからさ、僕に振られるなんて

思わなかったんだよ」

冗談よ、冗談。

「で、何の用？」

うん、この子のこと。わたしの目の前にいる彼女のこと、覚えてる？

「知ってる。吉崎さんだ」

意外。

「と言うか、昨日のうちに思い出しちゃったんだよね」

あ、そっか。

わたしは思い出した。昨日の会話の中に、佳奈の名前も出ていたんだ。思えば、坂上くんがわたしの中に入り込んでしまった原因の一つに、今の段階では坂上くんの憶測だけど、彼女がいた。佳奈が葬儀の場で「正美！」と大きな声で呼んだ所為で、坂上くんの魂はわたしを居場所だと勘違いしてしまったのだ。そしてそのあと、坂上くんは記憶のほとんどを無くしてしまった……。

どう？ 彼女を見て何か思い出さない？

「うーん……。吉崎さんとはあまり話さなかったしな……」

それはわたしたちも同じでしょ？

「そうなんだよね」

不意に、わたしは肩を叩かれてしまった。

「ねえ、正美ってば」

あ、じゃあちょっと待ってて。

「了解」

わたしは佳奈の方へと向き直る。自分では意識してないうちに、彼女に横顔を向けていたらしい。そこでは、佳奈が不審そうな目つきでわたしを見つめていた。

「あ、どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないわよ」

佳奈は不機嫌そうな表情になっていた。高校球児よりも焼けた正確には、焼いた、か　小麦色の肌。長いまつげ。目元にも軽くシャドーが乗っている。スツピンのわたしの顔を横に並べると、やっぱり化粧をした彼女の方が大人っぽく見える。でも、佳奈が化粧を落とすと、それはそれで垢抜けた感じになって大人びて見えるのだ。不思議。

「急にそっぽ向いちゃって。ぼうつと空なんか見上げちゃってさ」

「え、ホント？」

「マ、ジ、で」

きつと坂上くと会話をした所為だろう。心の中の声を聞くのに必死になって、どうやら外つつらはおろそかになってしまつよう

だ、わたしは。

そう言えば坂上くと話してる時に第三者がいるなんて状況は初めてだ。また一つ、発見をすることができた。坂上くと話するとき、わたしは自然に上を向いてしまうらしい。

ほら、なんとなく幽霊って浮いてるイメージがあるじゃない？  
その所為かもしれないわね。

「んー、まあ、それはいいとして」

「うん」

「シバセンに言つといて。あたし、保健室にいますって」

「何よ、またサボり？」

シバセンとは、うちの担任の柴原先生のこと。決して、司馬遷ではない。

で、佳奈のサボり。口実はいつもこれだ。

「だってさ……ヤじゃん。正美はヤじゃないの？」

「へ？ 何が？」

「あんたってホントいい性格よね」佳奈は呆れたように苦笑いを浮かべた。

「だから、何よ？」

ちよつとムツとしたわたし。ほっぺを膨らましてみる。坂上くんによく「面白い」と言われちゃうのも、少しは影響していたのだろう。

「雰囲気よ、雰囲気。あたしみたいに繊細な人は耐えられないの」

「何の雰囲気よ？」

「まだ分らないの？ 坂上くんが」

そう言いかけて、佳奈はやめた。  
わたしの表情がハッと上下に広がるのを見たのだろう。

「そ、そっか」

「……インイン、メツメツってやつ？ 駄目なのよ、あたし。おと  
といのお葬式もヤバかった」

確かに、彼女とあいつたしめやかな雰囲気とはまさに水と油だ。  
でも、繊細とはちょっと違う気もするけどね。

「てなわけで、気が向いたら顔出すから。じゃ〜ね〜」

佳奈は校門からどこか別の方向へと走り出してしまった。もう夏  
も終わり秋の入り口に差し掛かるうとしているのに、彼女のスカ―  
トは一向に長くなる気配がない。それでも、あんなに大股で走って  
いるのに……見えない。うまい、とわたしは感心する。

てなわけで、一人の知り合いが台風のように過ぎ去っていった。  
校門の前、ぽつんと残されるわたし。

そして、つぶやく。

「本日は？」

今度はさつきよりも早く、

「晴天なり」坂上くんが反応してくれた。

あ、くると思ってた？

「そりゃ、ね」

声に出した言葉は聞こえるんだもんね。

「うん、何となくだけどね」

あ、何となくなんだ。

「えーっと……島田さんの声はやかましいくらい聞こえる」

失礼ね。

むしろ、声がばかでかいのは佳奈の方なのに。

「吉崎さんの声は、やっぱり何となくだったな。お風呂の中から話してるみたいな」

なるほどね。わたしと坂上くんは、心が通じ合ってる分だけよく聞こえるのかしら。

少し考えて、わたしはとんでもなく変なことを言っちゃった気がした。

あ、いや、そういう意味じゃないのよ？　なんてゆーか……その、ね。

「あはは、どうして慌てるのさ？」

あ、べ、別に、慌ててなんかないわよ。

たはは、これは困ったと思った。心の中の会話って、思ったことがそのまま相手に伝わっちゃう。わたしを一つの工場としてたとえ



るなら、製品のチェックなしで出荷されてしまうのだ。

「ん、まあいいけどね。現に、僕と島田さんは心で通じ合ってるわけだし」

ん、んー、まあ、そうだけど、そうだけどね。

「だったらどうして腑に落ちないような表情してるの？」

だ、だって……。

それってなんか、恋人同士みたいじゃない。

正美、教室へゆく（前書き）

少し間が空いてしまいました。評価をしていただけるとありがたいですw

## 正美、教室へゆく

さて、教室のドアを開けてまず驚いた。坂上くんの席つて、窓側の列の前から三番目なんだけど、いつもだったら全然分らないてか気にもとめない。

でも、今日は違った。教室の中に入るなり、あれが坂上くんの席なんだとすぐに分かった。

花瓶が置いてあるのだ。白い菊の花。

「本日は？」

「晴天なり」

とうとう来たわね、教室。

「うん、そうだね」

分かる？ あれが坂上くんのいつも座ってた席よ。

「……うん、何となくそんな気がする」

ちよつと近寄ってみる？

「何だか怖いな」

あはは、怖じ気づいてどうするのよ。

「この教室の風景にも見覚えがあるよ」

だんだんと記憶が蘇ってきたのね。

取りあえず、わたしは自分の席に着くことにした。まあカバンを持ったままダイレクトであの花瓶のある席に向かったら、みんなに何て思われるか分からない。

わたしは座り慣れた椅子へと腰掛ける。そう言えば学校の椅子って、みんな同じに作ってあるはずなのに、何故か自分の椅子じゃないとしっくりこなくなってくるのよね。どうしてかしら。

わたしがカバンを脇に掛け終わると、後ろの席から声が掛かった。

「正美ちゃん、おはよう」

「おはよう」

彼女は、わたしの友人の一人。名前は……。

あ、そうだ、テストに使っちゃあ。

「本日は？」

「え、何？」

「あ、なんでもないの。あはは……」

笑って誤魔化すわたし。佳奈の時と同じだ。

「晴天なり」

坂上くんの声が聞こえたので、わたしは苦笑いをやめた。

「島田さん、合い言葉を挟むタイミングが下手だね。これじゃ合い言葉を決めた意味がないじゃん」

う、うるさいわよ。

「アレだね。思ったことはすぐやっちゃうタイプでしょ？」

そ、そんなことないもん。

でも実際のところ、凶星かも。

「まあいいや。で、何の用？ だいたいの想像は付くけどね」

この子のことは覚えてる？

わたしは両肘を机に置いてある彼女をちらりと見た。佳奈ほど派手じゃないけど、暗い子じゃない。むしろリーダーシップがあって、はきはきと物事を言える人間だ。家庭科で使う裁ちバサミみたいに、何でもザツクリと切れる性格。

「……うーん、ごめん」

謝ることないわよ。けど……。

「けど？」

坂上くんって、女の子苦手だった？

「ぐふ！ なにゆえに？」

あんまり覚えてないから、佳奈のことも、千里のことも。

彼女は、名を浜松千里という。

「に、苦手じゃなかったと思うけど……」

ふふふ、冗談よ。わたしだって、男子のことは何も分かんないもん。

「そ、そっか、冗談か」

あれ？ 意外と真に受けちゃったってことは……もしかして気にしてたのかもね。

「ねえ、正美ちゃん？」

ビクツとわたしは身をすくめた。どうやらわたしには反省というものが欠けているようだ。また坂上くんとの話で我を忘れていた。千里から見れば、自分との話の途中であさつての方向を向いて、しかも薄気味悪く微笑んでいる人にしか見えないだろう。

「は、はい！ 何でありましょう」

「どうしたの？ 何ていうか……その」

前述したとおり、千里は何でも真っ直ぐに示してくれる。変化球を知らないのだ。

「変だよ？」

う、言われてしまった。弓道みたいにストーンと的を射抜かれてしまう。

「そ、そうかな？」

「うん、変」

千里は今日も長い髪の毛を後ろで束ねている。短くするとボーイッシュに見えるからいやなんだって。わたしは、そっちの方が彼女には似合ってると思うけどね。

「どうしたの？」

「あ、いや……何でもないの」

実は幽霊が取り憑いちゃってね、その幽霊とお話してたのよ。わたしがそんなことを言ったとして、わたしのことをもつと変だと思わない人はいない。きつとしない。しかも千里だし。誤魔化すしかないのだ。

「まあ……普通でいろって方が無理だけどさ」

千里は教室をぐるっと見回した。つられてわたしも見る。

その雰囲気は、この前のお葬式の雰囲気を引きずっているかのようになんて沈んでいた。普段なら女子も男子もペチャクチャと話をする声が聞こえてくるのに、今日はそんなことが許されるような環境ではなかった。なるほど、佳奈が来たなくなるのもうなずける。先生が来る前なのに全員が着席してるなんて、初めて見る光景だ。

「正美ちゃんだけニヤニヤしてて……変よ？」

「う……」

坂上くんに言われた通りだ。

素直にしまったと思う反面、何でも坂上くんの言った通りになるのが悔しい気持ちも湧いてくる。わたしは自分のことを、本当にひねくれてるな、と思う。

「あ、ごめんね……わたし、不謹慎だったわよね」

千里はフツと口元を緩める。

「まあ、わたしに謝られてもしようがないけど」

それもそうだけど。

千里は頬杖を付き、小さなため息を一つ吐き出した。

「やっぱり嫌なもの……一人でもクラスメイトがいなくなるのつて。そんなことは当たり前のはずなんだけど、実際に起こってみるまで分からなかったわ」

たぶん、それは全てのクラスメイトが感じていることだろう。

わたしはもう一度坂上くんの机の方へと目をやる。窓側の列の坂上くんの机。朝日が窓から射し込んで、例の花瓶がツヤツヤと輝いていた。

「あの花……」ふと、わたしは疑問を覚えた。

「ん？」

「誰が置いたのかしら？」

素朴な疑問だった。

千里はまた表情を崩す。

「わたしが用意したの」

「え、千里が？」

「何となくそんな気になってね。まあ、一応先生にも相談したけど。喜んでたわよ、シバセン」

千里はこういうことによく気付く。しかも彼女には行動力が伴っ



ている。

わたしだったらどうだろうか？ 自分を少し遠くから見ると、そこには情けない自分しかいなかった。たぶん、何もしいままで残った月日を過ごしていただろう。坂上くんとは、わたしにとってそういった存在だったのだ。

もう一度、わたしは花瓶を見てみた。真っ白い 汚れないその花びらは、死者の清らかな安らぎを祈っているようにも見える。

そう、生きている人間のすることは、死んでしまった人間の安眠を願うことなのだ。そんなことを思ったら、坂上くんに対する気持ちも変わる気がしてきた。わたしの中から早く出て行って、と思うよりも、彼が早く安らかになれますように、と思った方がいいに決まってるのだ。

わたしがそんなことを考えていると、教室の前のドアが静かに開いた。

教室の中へのそつと入ってきたのは、我らが担任教師の柴原先生だ。本名を柴原毅と言い、180センチ以上の巨体の持ち主だ。高校時代は柔道でけっこう有名な選手だったらしい。だが、性格にちよつと難がある。堂々としてれば威厳は勝手に付いてくるのに、いろんなことにやたらおどおどしている。暴力も嫌いと言っていたし、声も小さい。ただ、根がいい人なので、生徒からの信頼はけっこうある。みんなから“シバセン”と呼ばれてるのも、親しみの証拠だ。

「みんな……おはよう」

心なしか、今日のシバセンはやつれているようにも見えた。いつものつやつやのほっぺも、潤いをなくしている。

教壇の上でクラスを見渡すシバセン。

またしても、教室の中の空気は張り詰めていた。

「今日は、よく登校してくれたね」

あ、一人サボってます。

「何て言ったらいいのかな……僕も正直、ビックリしたとしか言えないよ。教師になって五年目になるけど、こんなことは初めてだから」

シバセンはうつむきながら語る。象のようなその瞳には、もう涙が潤んでいた。クラスの神妙な雰囲気はさらに加速される。何人化の女子は、鼻をすすするような音を立てていた。

「でも、それだけじゃ駄目だよな。坂上のためにも……僕たちは何をするべきか考えよう。何かあったら、いつでも相談してくれ。みんなの悲しみは、先生も一緒に感じてるから」

顔を上げるシバセン。

「さて、じゃあ……いつまでもこんな調子ではいられないからな」

ずずつと鼻をすすると、シバセンは瞳をこしこし擦った。そして黒い出席簿を開き、出席を取り始めた。出席番号1番の男子の名を呼ぶ。安藤くんが、湿った声で返事をした。

……………

どう？ 坂上くん。

廊下にて。わたしは窓の外をぼうつと眺めている。真つ青な青空。理科の実験で先生が硫酸銅水溶液を見せてくれたことがあったけど、ちょうど同じような色をしている。その空に浮かんで、小さな雲が

漂っている。海を進む小舟のように。

「うーむ、実はけっこう思い出してきたりして」

お、やったじゃない。

わたしが廊下に出たのには理由がある。

一つは、佳奈と同じ理由。あのような雰囲気には、やっぱり耐えられない。

もう一つは、坂上くと話をするため。わたしの、坂上くと会話をしてる顔を他の人に見られるのは厳しい。何だあいつ？ と思われてしまうだろう。まるで、禁煙スペースから逃げるヘビースモーカーの気分だ。取りあえず、窓を向いてればどんな顔をしてても問題ないはず。

「シバセン、いたね」

うん。

「あんな熊みたいな人は忘れられないよ」

あはは、怒られるわよ。

「うーん……でも、いいこと言ってた。僕は感動しちゃったよ」

わたしも。シバセンのこと、ちょっと見直しちゃった。もっと頼りない人だと思ってたけど。

「だけどき、何か複雑な気分だよ。当の僕があんな話を聞いちゃうとね」

それもそうね。

「どんなりアクションすればいいのか分からないね。まさしく別世界のことなんだな、て実感しちゃったよ」

そうなんだね。坂上くんがいるべき場所は、この世界でないのだ。わたしと変な形で繋がってしまっているものの、こっちの世界へは干渉できない。坂上くんが大声で叫んだとしても、それはわたしの心にしか響かないのだ。

そして、わたしも同じような事態が起きている。

坂上くんとこの世を結ぶ中間地点となってしまうたわたしは、坂上くんの死を千里やシバセンのようにには感じられない。

そう、わたしもまた、彼女たちとは違う世界を生きているような気分になっているのだ。

「でもさ、予想はしてたけど」

うん。

「みんな、暗いね」

そ、そりゃそうよ。

今更ながら、坂上くんって、何かが足りてないような気がする。気の所為なのかもしれないけど、感覚がズレてるような感じが否めないのだ。

もっとも、わたしは生前の坂上くんをほとんど知らないし、それ以前に、対象比較のしようがない。自分の死について周囲が悲しんでいる時にどういう反応をするべきなのか、を。

人が死ぬってというのはそういうことなのよ。

「うーむ、ずいぶんと上から語るね」

何よそれ。嫌み？

「そうじゃないけどさ」

坂上くんがわたしの中にやって来てから、今までこんなムードになったことはなかった。わたしと坂上くんの意見がぶつかり合っているのを感じる。

でも、坂上くんが何をこだわってるのか、わたしにはおぼろげながら分かる気がした。

今のわたしが気に掛かっているのは、坂上くんのひょうひょうとした態度。だけど、坂上くんにとってはそれが普通の神経なのだ。現世と切り離された坂上くんにとって見れば、みんなの落ち込んだ様子はなんにも心に響かない。それは坂上くんにまだ意識があるから、とかそういう理由じゃなくて、もっと深い意味で。

もう別世界のこととなってしまったから、関わり合おうという意識が枯れてしまったのだ。

……人が死ぬってというのは、そういうことだから。

「ん、まあいいや」

ケンカしても始まらないしね。

死んでもいいなのに、わたしは坂上くんの気持ち分かる気がする。坂上くんの言う通り、わたしたちはやっぱり気が合うのかもしれない。分かっているから、むしろ、わたしの意見との衝突が起きてしま

うのだ。わたしは、坂上くんの立場が違っから。

「で、これからどうする？」

うーん、どうしようね。行動を起こすには早すぎる気がするけど。

「そうなんだよね」

ショックから立ち直るのに、数日という時間は短すぎる。今のみんなの心は、飴細工のようにもろくなっているのだ。こんな状況で生前の坂上くんのことを根ほり葉ほり聞かれたら、誰だって不快に思ってしまうだろう。

聞き込み調査は、まだ自粛ね。

「それがいいと思う」

今わたしたちがすることは、坂上くんの落とし物を一つでも多く探すことね。どんな小さなことでも、何に繋がってるか分からないからね。

ここでわたしは変なことを思い出してしまった。

この前に見たテレビ番組で、マジシャンがマジックをしていた。彼はいろんな色のハンカチをパツと消してしまい、それをポケットの切れ端から一気に取り出した。いつの間にか結ばれていた七色のハンカチの先からは、万国旗まで飛び出してきた。

あんな風に、坂上くんの記憶も一気に出てくればいいのに。

じゃ、そろそろ教室に戻らないと。

「うん」

何か思い出したら言ってね。どんなささいなことでもいいから。

「分かったよ」

坂上くんに別れを告げ、わたしは教室のドアをくぐった。空気が湿った空間にわたしは身を投じる。相変わらず雰囲気重い。黒いもやが浮かんで見えるようだ。

もう少し明るくしたら？　なんて言ったら、きっと軽蔑されてしまっただろう。

わたしだけが知っていてみんなが知らないことなんだから仕方ないんだけど、やっぱりそんなことを思ってしまう。

でもね、ほんのちょっとだけは晴れ間があってもいいんじゃないかな。曇り空じゃ、心が暗くなるばかりだよ。

ね、本日はこんなに晴天なんだからさ。

## 正美、放課後になる

放課後となった。六限ある時間割を全てこなし、わたしは学業の鎖から解放されることとなったのだ。

相も変わらず、教室の中の空気は沈んでいた。飛び交う言葉も少なく、笑顔などはほとんど見られなかった。

特に会話もなく、生徒たちはそれぞれの場所へと散ってゆく。

重い空気を除けば、いつもの放課後の風景だ。部活をしてる人は部活の集まりへ。委員会に所属してる人は委員会へ。そして、何も予定もなく暇を持て余している人。ていうか、わたしのことだね。はぶらぶらしながら自宅へと。そうして、また明日の朝に会うまでみんな違った生き方をすることになる。

結局、佳奈は学校を全部サボった。気分屋な彼女のことで、明日も来ないかもしれない。

ひとけがまばらになってゆく教室の風景を眺めながら、わたしは合い言葉をつぶやいた。

「本日は？」

「晴天なり」

と言っても、もう西日が傾き掛けているけどね。これから秋が深まると、あつという間に夕暮れになっちゃうようになる。

何か久しぶりね、坂上くん。

「うん、結局は朝から話さなかったね」

そうね。体育とかあったし……わたし気付いたわ、授業っていろいろ忙しいのね。今更だけど。



「普段はぼうつとしてるからじゃないの？」

失礼ね、違うわよ。

「あはは。まあ、僕の方には何かあったという間だったな」

そうなの？

「うん、島田さんと話してないと……時間の流れが急になるような気がするんだよ」

確かに、することがないもんね。

「そうなんだよね」

どうなの？ その時の坂上くんは状況は。

「うーん……ホントになんにもなく時間が早送りになる感じ、かな」

ふむ。

「ほら、強く意識しないと周りの情報が入ってこないんだよ。強く意識しすぎちゃうと、島田さんの心の中まで入り込んでうから気を付けないとだけ」

じゃ、なるべく話をしましょうよ。

「え？ 別にいいけど……」

何か疑問でも？

「い、いや、疑問ってわけじゃないけど」

ほら、坂上くんのためよ。

「僕のため？」

坂上くんが“坂上くん”でいられるのは、この時間だけなんだから。わたしと会話をしてる時だけ、ね。

「……そうか。そうだね」

そう言うのと、坂上くんは一つため息をついた。そのため息が何を意味してるのか分からなかったけど、わたしは何故か寂しい気分になってしまっていた。

もうすぐ夕方がやってくる。そんなことを予感させる冷たい風が、窓からわたしの髪の毛を揺すっていた。秋の夕暮れて本当に物寂しい。昔の人がよく歌に詠むわけも、少し分かる気がした。

「正美ちゃん、じゃあね」

思わず、わたしは軽く上下に揺れた。意表を突かれたとはこのことだ。ぼうつと窓の方へ思いを馳せていたら、真っ直ぐな彼女の声がわたしの無防備な心を揺さぶったのだ。

「あ、うん、じゃね」

「今日はずーっとぼうつとしてたね？ やっぱり変よ」

そう言い残して千里は教室を後にしてしまった。別れ際に言うせ

リフがそれですかい……。わたしは苦笑いを浮かべた。

千里はテニス部に所属している。スカツと爽やかな彼女にぴったりのイメージだ。

わたしはまた教室を見渡す。みんなの足がいつもより早い。いつもならぐだぐだと男子も女子も談笑しているのに、今日は逃げるようにいなくなってしまった。まあ無理もないか。

そんなこんなで、教室の中はついにわたし一人になった。でも、実は狙ってたりして。

ねえ、これで調査ができるわよ。坂上くんの机。

「あ、だから帰らなかったのか」

わたしもいろいろと考えてるでしょ？

よし、わたしは意を決して立ち上がった。目指すは窓側の机。同じ教室の中、距離にしたら半径十メートルくらいだろうか。今日はとても遠く見えた。白い菊。それ以外、何も無い。

坂上くんの荷物は……。やっぱりないわよね。

「うん、ないね」

親御さんが持っていたんでしょうね。

「そうだね」

そう言えば、親御さんについては何か思い出さない？

「うーん……残念ながら」

まあ、無理もないことだと思った。わたし今まで、彼の両親に繋がるような情報には触れていない。

坂上さんの記憶探しは、地面に埋まった野菜を掘る作業に似ている。ちよつとでも顔が見えていれば　きつかけさえあれば、すぐ掘り起こすことができる。でもこれがないと、掘り出しようがない。

ゆつくり思い出しましょ。特に……家族みたいに大切な人たちはね。

「大切な人……大切だった人、だね」

……あ、ごめん。

坂上さんの声は、悲しそうになってしまった。

「ううん、別にそういう意味じゃないけど」

わたしは少しの疑問を覚え始めていた。坂上くん、どうかしたのかしら？　あの、脳天気で楽天家の坂上くんじゃないみたいだよ。

「ごめんごめん、なんか変だよ。僕」

変ってわけじゃないけど……。

「あはは、気にしないで」

ま、まあ坂上くんがそう言うなら。

「それよりも、何か僕の痕跡は残ってないのかな？」

ちよつと待つてね。

坂上くんにそう言われ、わたしは机の中を調べることにした。彼の言う通り、もしかして何か残っているかもしれない。

わたしが机の中を覗き込もうと腰をかがめた、まさにその刹那だった。

「何やってるんだよ？」

突然響いた男の人の声に、わたしの心臓はきゅっと縮まった。

## 正美、ケンカする

「島田？ 何してるんだ？」

訝しげな表情を保ったまま、彼はわたしの方へと歩み寄ってくる。  
……困った。

今のわたしは、死んだ坂上くんの机の中を覗き込もうと身をかがめている女子、にしか見えないのだ。とっさにいい言い訳が見つかるはずもなく、慌てふためいたわたしは椅子を思い切り倒してしまった。動揺が次の動揺を運んでくる。完全なパニック状態だ。

「……どうした？ そんなに慌てて」

「あ、いや、その……」

首を交互に振るのだが、それが何を意味しているのか、彼にはまったく分かっていないだろう。だって、わたしにも分からないだもん。

た、助けて。坂上くん。

「え、僕？」

あなたしかいないでしょ！

「そう怒鳴らなくても……」

早く！ 何か助言をちょうだい。

「素直に言っちゃえば？」

「坂上くんの机を覗こうとしてました」って？ そんなこと  
言えないわよ。

「何で？」

だって……。

わたしはもう一度彼の目を見やった。真っ直ぐ、わたしのことを  
じっと睨んでいる。

安藤くん。安藤新一くんだ。

彼は坂上くと仲が良かった。休み時間にはいつも話をしていた  
し、中学校も一緒にいた。とても気が合う様子だった。

坂上くん……たぶん、安藤くんのことも忘れちゃっているんだと  
思う。

言えないわよ。このクラスで、坂上くんがいなくなって一番悲し  
んでいるのは……きっと安藤くんだから。

ふ、不謹慎な人だって思われちゃうでしょ。

「うーん……そっか」

ほら、早くいい案を出して。

「……じゃあ、コンタクトを探してたってことにしたら？」

こ、古典的ね。まあいいわ。この際、仕方がないわね。

わたしは息を大きく吸い込んだ。これから水に潜るみたいに。嘘  
を言ってる時の気分はいいものじゃないからね。一気に吐き出すよ

うに、わたしは言った。

「あ、あのね、安藤くん。コンタクトレンズをなくしちゃって、それを探してたのよ。誰かが来るとは思わなくてね、ちよっとビックリしちゃっただけ。あはは……」

「そ、そう。だったらいいんだけど……」

勢いに任せてまくし立てたわたしに圧倒されたのか、安藤くんはぎこちない様子でうなずいた。

しばらく沈黙が訪れる。遠くの方では、野球部が「オーツ」とか言ってる声が響いてるけど。

「……島田」安藤くんはつぶやいた。

「はい？」

「お前はさ……明るいよな。羨ましいよ」

え？

安藤くんは隙間風のようなため息を一つつくと、わたしに背を向けた。そして自分の机に向かうと、彼の荷物を肩に引っ掛けた。そのまま、安藤くんは教室を後にしようとドアに近付いてゆく。

「あの、安藤くん」

「何だ？」

彼は振り返ると、寂しさの滲んだ瞳をわたしに向けた。  
わたしは言った。

「坂上くんって……どんな人だった？」

一瞬で、安藤くんは無表情になった。驚きもしない。動揺もしな



い。ただ、ぺらりと剥がれ落ちてしまったように表情を失った。

わたしは思った。本当に悲しい部分を突かれたときは、人ってこういう顔をするんだ。

しばらくの間、真空になったみたいな沈黙が訪れた。

「……それを聞いてどうするんだよ」

彼はようやく口を開く。

投げやりな、ため息のような口調だった。

「え……ちよつと気になって」

また沈黙。

そして、安藤くんは淡々と言った。

「いい奴だったよ。断言できる。あんなにいい奴はいない。いつでも他人のことばかり考えて……損ばかりしてた」

彼はわたしに、またくると背を向けた。

そして、わたしではなく、黒板をただ見つめて、

「あいつが死ぬなんて、世の中は間違ってる……」そう言った。

……

「ねえ、何であんなこと聞いたの？」

わたしは薄いオレンジ色に染まった通学路を歩く。脇に目をやると、わたしと同じように下校中の小学生がけらけらと笑いながら走り回っている。

……安藤くんのことね。

「そうだよ」

坂上くんはきっかけさえあれば記憶を取り戻すことができる。だから、初めは忘れていた安藤くんのこととも思い出したようだ。わたしの口から、彼の名前が出た瞬間に。

安藤くんを思い出したってことは……生前の坂上くんにとって、彼がどんな存在であったのか、それも思い出したことになる。だから……、

「安藤にあんなこと聞くなんて、いくら何でも非常識じゃないのかな」

おっしやる通りです。

「だったら、どうしてあんなこと言ったのさ」

だってわたし……なんにも知らないんだもん。

「へっ？」

坂上くんのこと。わたしは一つも知らないのよ。わたしが知ってる“坂上くん”は、こうやってわたしに取り憑いたあとの坂上くんなんだもん。

「それで、知りたくなつたから聞いたってこと？」

そうよ。悪い？

あの時、本当に無意識のうちに口に出てしまったのだ。  
坂上くんって、どんな人だった？ と。

「あは、開き直り？」

開き直ってなんかないわよ。

「そういうのを開き直りって言うんだよ」

そんなんじゃないって言ってるでしょ！

わたしの近くでじゃれあっていた男の子たちが、びっくりと身をすくめてわたしを見つめた。

どうやら、声に出して叫んでしまったようだ。カッと顔が赤くなる。

「……どうしたのさ」

どうもこうもないわ。

「うーん、なんか機嫌が悪いみたいだね」

そ、そんなことない。

「僕、少し邪魔みたいだ。それじゃ、またね」

え？ さ、坂上くん？

坂上くんの気配はふっと消えてしまった。

冬の朝、吐いた白い息が見えなくなってしまつように、あっけな  
く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0625a/>

---

本日は晴天なり

2010年10月28日08時05分発行